離別

ビルの屋上から眺め渡す街
あちこちに見える記憶
それらは何と美しく魅惑的に映ることか

一昨日さまよい歩いた下町では
前かがみに腰を折って
ぼろぼろの乳母車を押している人

毎年咲き誇る桜並木は、既に春を感じ
固く小さいけれども、点描のように霞む枝に
ほんのりと精気を通わせている

しかし、それら懐かしさとよそよそしさは
混ぜ合わされた原色の絵の具のように
薄汚い排泄物の色をしている

それらを手繰り寄せることに
どういう意味があるのか
離別を前にして

それとも、私という住処から
逃げ出そうとしているのか
今しも消えてしまおうとしている住処から

あるいは、自然の理として
増殖しすぎたミンクのように
自ら海へ飛び込もうとしているのか

振り返ると、いま上ってきた階段への入り口が見える

そこは、眼下に広がる街への入り口でもある
既に私とは無関係だが、魅惑に満ちた街への

しかし、同時にそこは
呆けた瞳で、私をじっと見返したまま踊っている
恐怖に満ちた明日への入り口でもあるのだ

　　社会という得体の知れぬ実体の一員として
　　加速する時間軌道に乗せられ
　　生活と引き換えに手渡される、義務、義務、義務

　　どうするのだ、という問いの連続
　　累積してゆく疑問点
　　包囲

今や、その入り口へ戻ることには
復讐心に駆られた果ての
嫌悪と憎悪しかない

第３の
魅惑的な道を選ぶこと
ここから跳ぶこと

（何の不安もない・・・）

(2010.2.21)